



「リハビリテーション白書」

日本リハビリテーション医学会編

我が国におけるリハビリテーション医学も、発芽してより十五年有余の歳月をすぎるが、その間に見られる進歩発展の過程のすばらしさは、まさに目を開かせるものがある。

しかしながら欧米のそれと比較した場合、確固たる基盤の上に構築された体系づけでは、いまだほど遠くチグハグな感じがしてならない。

このように何かしら不満と焦燥感に苛まされていた時期に、それらの解消と満足への指標とさせて頂ける、リハビリテーション白書に遭遇したことは、事実感銘の極であった。

まずこの書の作成では日本リハビリテーション医学会が、蘊蓄を傾けて執筆者に国内、国外でも、博学と豊富な経験を以て知られている、高名なる七学者を送ったことが、それぞれの担当専門分野で十二分に生かされている。次に内容では白書なる書名が示すように、リハビリテーション医学の現状と、将来への展望が、リハビリテ

ーション医学の理念に始まり、治療の実際、教育、研究の問題点、疾患別アプローチの要領、発生する多面的課題と、それらに対する建設的展望、さらに関係する必要事項の認識と探究、国際的参画への実現と努力などが、序論、総論、各論、結論、資料と、明快なる区分の下に論述されている。この膨大なる領域を簡明にまとめあげた手腕は、さすがは日本リハビリテーション医学界を代表できる学識者であると、敬服の至りであり同時に誇りに思う次第である。

したがってこの書は単にリハビリテーション医療の実践を志す臨床家のみならず、人間福祉への貢献を当為とするすべての人達に、必読を推薦できる良書である。

何時の日か将来、歴史的踏襲の中で比較研究がなされる折に、その存在意義が高く評価され、価値ある遺産として交番させうる名書の一冊である。

(A5, 頁456, 医歯薬出版, ¥5000, 1979)

(九州リハビリテーション大学校 理学療法士 和才嘉昭)

「けやき並木」

砂原茂一著

五月になると新緑の枝をのばした、けやき並木が高々と丸天井をつくり、その根もと沿いには色華やかな、つつじが咲き誇る。門から東京病院へ続く道の情景である。長い歳月の通り路に四季を共にしたこの老木にあやかって著書の題名を「けやき並木」と名づけられた砂原先生のお気持ちがひしひしと伝ってくるようにさえ思われる。御多忙の中にも必ずどこかに時間をさいて逢って下さる。そしてその言わんとする処をいとも的確にとらえて下さる。その代り訳の解らぬことを言おうものならそれもまた的確にとらえられる。この何分にも見識の広い知識豊かな学者であり人格者であられる先生の前に何とそのへだたりの遠さに敬服したことだろうか。そしてまた眼鏡の奥に笑うやさしい眼に何と強く敬慕の念にとりつかれて行ったことだろうか。

「けやき並木」は先生の東京病院長、30年間余の公私にわたる生活の中から特別講演、論文、随筆等をエッセーにまとめられたものである。B5版、348頁から成るもので、旅、本、人、リハビリテーション、くすり、結核、医学医療、その他、と8つの組分けで構成されている。拝読してまず驚くことは、結核やくすりについてはもと

より先生の御専門であるからと思うにせよ、旅も、人も、リハビリテーションもすべてがその徹底した知識の豊かさそしてその意味をくみとられる先生御自身の深い人道主義に根ざしたお考えである。リハビリテーション医学をかくも綿密に究明し日本の歴史と現状にむすびつけ、日本人にわかりやすく日本語でこの道の理念をかくもしっかりと示して下さったのはまさに、砂原茂一先生でいらっしゃる。リハ医学を抜きに医療を行えない今日、先生の私共にご教示下さるご功績はあまりにも大きい。この本には学者として、研究者としての学ぶべき範があり院長として医者として一人の人間としての苦悩があり情感がある。必ず一度、手にし、机上の友とし枕辺の友として熟読なさることを心からおすすめしたい。実はこの書評をおうけする時、身分不相応に思えてご辞退したかった。あえておひきうけできた勇氣は私もまたもう一人の先生の熱烈な信奉者であるという自負心からの故であったかも知れない。

(B5, 頁348, メジカルフレンド社, ¥2,500, 1979)

(国立療養所東京病院付属リハビリテーション学院 作業療法士 矢谷令子)